

ドバイ日本人学校における総合的な学習の時間実践

前ドバイ日本人学校 教諭

北海道帯広市立大空学園義務教育学校 教諭 重 堂 真 也

キーワード 在外教育施設、ドバイ、総合的な学習の時間、現地理解、国際交流、探究的な学び

赴任校の概要（2025年4月14日現在）

ドバイ日本人学校

Dubai Japanese School

URL：https://asp.schoolweb.ne.jp/c20200114

児童生徒数：小学部89人 中学部27人

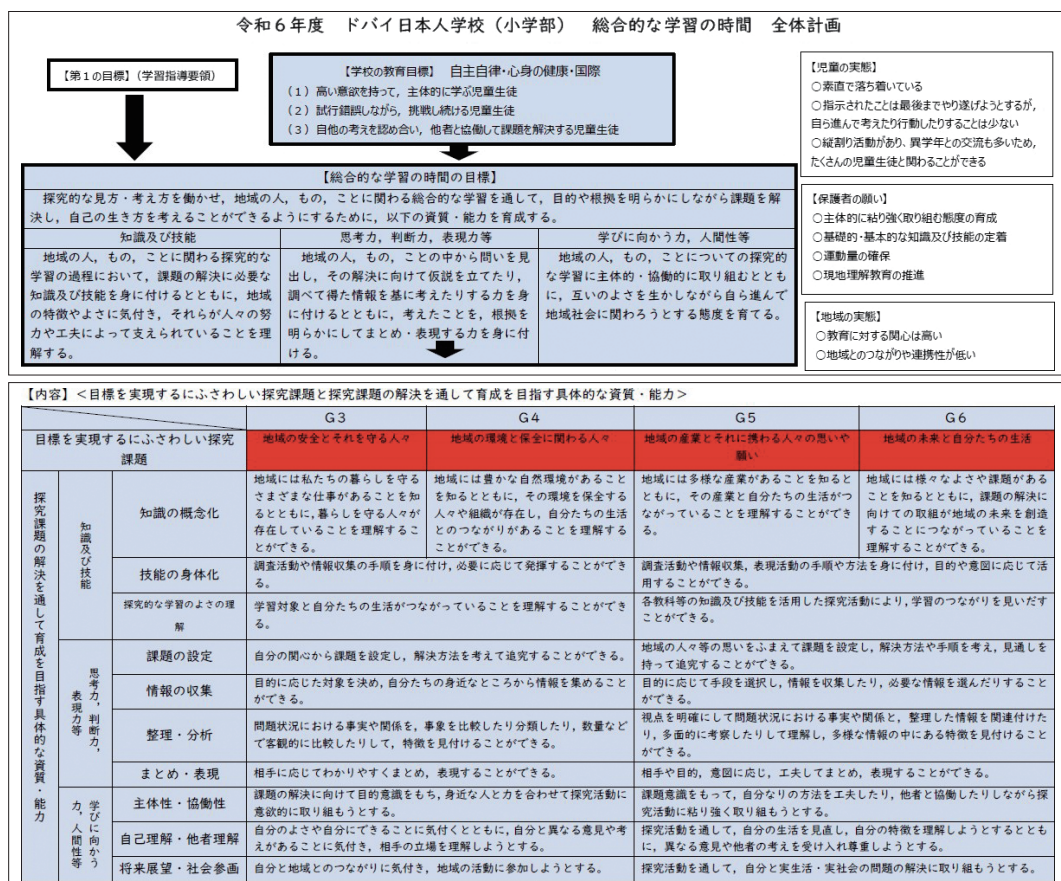
1 はじめに

令和4年4月より、令和7年3月までの3年間、ドバイ日本人学校（昭和55年〔1980年〕設立、児童生徒116名、文部科学省派遣教職員15名）にて教鞭を執る機会を得た。UAE（アラブ首長国連邦）という多民族国家に位置するこの学校では、日本の学習指導要領に基づいた教育とともに、現地の文化や国際的な環境を活かした教育実践が求められている。私はその中でも「総合的な学習の時間（本校で称するところの「ミナレ学習」）」を通じて、現地理解と国際交流、そして探究的な学びの在り方を模索した。この報告では、6年生・3年生の担任時に行った実践とその成果、課題についてまとめ、今後の教育実践に資することを目指す。

2 ドバイ日本人学校における「総合的な学習の時間（ミナレ学習）」位置付けと学校・地域の実態

ドバイ日本人学校では、「総合的な学習の時間」を現地の象徴的な建築物である、イスラム教のモスク（礼拝堂）に付属する塔「ミナレット」にちなんで「ミナレ学習の時間」と名付け、現地理解教育を柱とした特色ある学びを推進している。現地の文化や社会を題材にした探究的な学習が重視されており、校外学習や発表活動を通じて、児童が現地をより深く理解する取り組みが毎年積み上げられている。

また、児童は多くが日本からの編入生（在籍期間は数日の場合もあれば数年間と幅広い）でありながらも、ドバイという異文化環境に日常的に触れているため、視野が広く、現地に対する興味・関心も高い。一方で、日本語での調べ学習や表現活動には個人差があり、特に低学年では教科とのつながりや学びの意味づけに課題があると感じた。保護者アンケートでは「せっかくドバイ（異国）に住んでいるのだから、ここでしかできない経験をたくさんさせてほしい」という声も寄せられていた。こうした思いに応えるためにも、学びを地域や社会と結び付けることが求められた。小学部（1年生～6年生）から中学部（7年生～9年生）にかけて、系統的に現地理解やキャリア教育、国際交流などが設定されており、学年ごとにねらいが明確に示されている。以下に令和6年度ドバイ日本人学校（小学部）総合的な学習の時間の全体計画の一部を示す。



令和6年度ドバイ日本人学校（小学部）総合的な学習の時間の全体計画の一部

3 実践の内容と工夫

(1) 6年生の実践より

「ドバイの魅力を日本に発信しよう」というテーマで、ドバイ日本人学校の特色や近隣の歴史的建造物（ドバイフレーム、モスク、ムハンマド・ビン・ラシード図書館、ブルジュ・ハリファなど）を題材に調べ学習を進めた。これらの施設には教師自身が事前に訪問し、授業にどう生かすかを考えた上で指導に臨んだ。

その成果として、北海道帯広市にある大空学園義務教育学校の英語・国際交流同好会（5年生～9年生）とのオンライン交流を通して、ドバイの良さを日本に伝える活動を行った。ドバイ日本人学校と帯広市立大空学園のオンライン交流を通して、日本側の子ども達からは様々な感想が寄せられた。「世界一高い建物や図書館の変な形、大きな額縁など、ドバイには驚くような建物がいっぱいあって、いつか行きたいと思った」「冬なのに46℃もあるなんて日本とは正反対だと思った」「海の色がとてもきれいで、水で遊べる施設があることにも驚いた」といった異文化や自然環境への驚きや興味が多く見られた。また、「ドバイの日本人学校でも日本と同じような授業をしていることに驚いた」「ドバイのクラスは家族のような雰囲気だった」「日本と違うけれど、そんなに差がなくて親近感を覚えた」など、同じ日本人としてのつながりや共感にも触れていた。さらに「発表してよかった」「また交流の機会があれば参加したい」「クイズが楽しかった」「相手のリアクションが元気で自分も楽しかった」といった発信することの楽しさや意義に気づく声も多くあがった。印象的だったのは、「高いタワーのマンションが9億円、家賃が月300万円なのが衝撃だった」「図書館の形や展示に興味があった」「ドバイの建物はアートみたい」といった、文化や社会の背景にまで踏み込んだ興味関心が生まれていたことである。

このような反応を通じて、子ども達が自らの視点で情報を受け取り、比較し、驚き、考え、そして自分の

言葉で表現するというプロセスを、実感をもって経験していたことが分かる。特に印象的だったのは、ドバイと日本の違いを一方的に見るのではなく、「違いがあるからこそ面白い」「羨ましいけれど、自分たちの暮らしもいいなと思えた」といった、相対的な視点での理解の深まりが見られた点である。また、「また交流したい」「知らないことをもっと知りたい」という声からは、学びが一過性のイベントにとどまらず、次の探究や関係づくりへとつながっていることも伺える。このように、子ども達の感想には、異文化理解の入口としての「驚き」や「発見」から始まり、主体的な関心や共感、さらには自己と社会・世界をつなげて考える思考の芽生えまでが、確かに存在していたと感じた。加えて、ドバイ日本人学校の子ども達からも、北海道の食べ物や名物について「美味しそうだった」「知らなかったことを知れて嬉しかった」という声が多く聞かれ、特に海鮮丼や豚丼、ジンギスカン、種類豊富なアイスクリームに強い興味を示していた。また、「雪が積もったところに行ってみたい」「日本の学校と繋がれて楽しかった」「ドバイでは食べられないものが多く、お腹が空いた」といった声もあり、北海道への憧れや異文化への親しみが深まった様子がうかがえた。さらに、自分達も発表に参加できたことを「良い経験になった」「こちらのことも知ってもらえて嬉しかった」と前向きに捉える姿も見られた。これらの感想から、ドバイ日本人学校の子ども達も、異文化交流を通して日本の地域の魅力を新たに発見し、自らの言葉で感じたことを表現する経験ができたことがうかがえた。また、相手に伝える活動を通じて、異文化交流の楽しさや発信することの意義にも気づくきっかけとなった。

(2) 3年生の実践より

「日本との比較」をテーマに、生活や施設の違いを体験的に学べるよう、社会科の学習と連携しながら様々な校外学習を実施した。ブルジュ・ハリファの見学では、世界一高い828mの建物を実際に体感し、日本にはないスケール感や観光資源の大きさに驚きの声が上がった。食品工場見学では、製品生産の現場を間近で見学できる環境に驚き、衛生面に配慮しながらも児童の学びを深める工夫に感銘を受けた。子ども達は「日本の食品工場とは違って、すぐ近くで作業を見られた」と感想を述べ、ドバイ独自の工場見学スタイルに興味をもっていた。スーパーマーケットの見学では、専門店型の店舗構成や試食体験を通じて、日本のスーパーとの違いを比較し、販売戦略や顧客対応の工夫に気づいた。ドバイ消防署では、消火ホース体験や消防車乗車体験、施設見学を通じて、防災に関する知識と実際の活動の大変さを肌で感じる貴重な経験をした。また、ドバイ警察署では、世界初のスマートポリスステーション (SPS) を知り、ICTを活用した先進的な治安維持のあり方に驚いていた。ドバイメトロ乗車体験では、日本人職員のサポートを受けながら乗車体験を行い、異文化環境における言葉の壁と、その中でも丁寧な説明の重要性を実感する場面もあった。

これら一連の体験を通じて、子ども達は「日本と似ている部分があれば、全く違う部分もある。それが面白い」「ドバイならではの良い部分がある」と語り、比較を通じたことで単なる知識習得に留まらず、主体的に異文化を比較し、より学習内容を深めながら異なる社会の良さを認識する力を養うことができた実感している。

4 成果と課題

実践を通じて、子ども達の一番大きな変化は、ドバイの良さや日本の良さを改めて実感し、考えることができるようになった点である。それは単なる知識の獲得ではなく、自分たちのアイデンティティの確立や異文化理解につながる深い学びであった。実践を行う中での課題として、調べ学習や表現に時間がかかるため、年間を通じた計画づくりが必要である、また子どもによって理解の深まりに差があるため、支援や（特に低学年では）ICTを活用できるようになるための十分な時間の確保も必要であることなどがあげられる。

5 おわりに

総合的な学習の時間を通じて、子どもが国際理解教育の根本に触れる機会となったことは、指導者として非常に意義深かった。異文化の中で育つ子ども達が、自分の言葉で自分の考えを伝えようとする姿は、探究的な学びの本質を体現していた。一方で、総合的な学習の時間の時間数が限られる中で、十分な調べ学習やまとめの時間を確保することに課題を感じた。また、子どもの表現力や理解度には個人差があり、発表に向けた支援体制や学年間での連携強化の必要性も見えてきた。この3年間の経験を、現任校（帯広市立大空学園義務教育学校）をはじめ、今後の教育実践に生かしていきたいと強く感じている